『とはずがたり』研究
―その独自性―

古谷　友香里

はじめに

鎌倉時代に成立した日記『とはずがたり』の終盤には、後深草院二条（以下、二条）が後深草院（以下、院）の棺を裸足で追いかけたことが描かれている。

やがて京極面より出でて御車の後に参るに、日暮し御所にさぶらひつるが、「事なりぬ」とて御車の寄りしに、あわてて、履きたりし物もいづ方へか行きぬらむ、はだしにて走り降りたるままにて参りしほどに、（中略）ここよりや、止まる止まると思へども、立ち帰るべき心地もせねば、しだいに参るほどに、物は履かず、足は痛くて、やはらづつ行くほどに、皆人には追ひ遅れぬ。　（巻五・五〇七頁）

遠くからでもいいから棺を見せてくれと知り合いの女房に頼むが断られ、女房の衣をかぶり御所にたたずんで機会をうかがうも、院の棺を見ることはできなかった二条は、履物が脱げたことも気にせず、裸足で棺の入った車を追いかける。貴族の女性が裸足で走るということはどの古典文学作品にも描かれないものであり、私が『とはずがたり』に興味を持つきっかけとなった場面である。

『とはずがたり』は宮内庁書陵部で発見されて以来、特異な作品として扱われ、研究されてきた。玉井幸助氏[1]は論題の副題に「特異の文学」という表現を入れ、「女性の秘密を、これほどまで包み隠さず告白した文学は他に類例を見ない」と述べた。次田香澄氏[2]も「鎌倉時代宮廷に仕えた作者が、その半生にわたる愛の遍歴を、ありのままに記述したという点で、わが古典文学のなかで稀にみる性格をもっている」と述べており、今まで

古典文学作品では描かれてこなかった内容ゆえに注目されてきたと言える。

『とはずがたり』の特徴として内容の独自性の他に、物語文学作品、特に『源氏物語』を踏まえて書かれていることが挙げられる。清水好子氏[3]は、

巻一のはじめ、院の寵姫となる日から、彼女は自分たちを光源氏と紫の上になぞらえ、つねに若紫の巻を連想させる書き方をしたのは、おのれの生涯に対して、その出発点からしてすでに貴族の生き方として先例に叶ったもの、理想性を帯びたものとしての承認を与えていることになる。

と述べている。また、西沢正史氏[4]は、

『とはずがたり』においては、『源氏物語』の紫の上・女三の宮などの女性たちの物語を二条の人生と重ね合わせるという方法は、美化・理想化あるいは悲劇化という脚色効果をもたらし、物語性に富んだドラマチックな日記文学的世界を構築させることに成功しているものとみられる。

と述べており、二条が『とはずがたり』の中で自分の人生を『源氏物語』に重ねた点が注目されてきた。

しかし、『とはずがたり』には『源氏物語』と同じような世界が展開されているのだろうか。先に述べたように『とはずがたり』には他の作品では書かれない事柄が描かれており、それらは『源氏物語』でも登場することがない。また、『とはずがたり』の中の二条の人生が、紫の上や女三の宮と類似しているとも思えない。では、『とはずがたり』はどのような世界を創り出しているのか。

本論文では、『とはずがたり』と『源氏物語』の相違点に注目し、『とはずがたり』の独自性を考えたい。また、『とはずがたり』と鎌倉時代に書かれた日記との違いを考察し、二条がどのような視点で作品を書いているのかを考え、『とはずがたり』の世界にせまりたい。

なお、本文引用は『とはずがたり』『源氏物語』『更級日記』『弁内侍日記』は新編日本古典文学全集（小学館）、『中務内侍日記』は岩佐美代子氏の『校訂 中務内侍日記全注釈』（笠間書院）による。

第一章　『源氏物語』との相違点

第一節　後深草院との関係　―二条と紫の上―

『とはずがたり』で『源氏物語』の表現や場面が引用されている箇所について、清水好子氏[5]が細かく指摘している。また、

二条と紫の上の境遇の共通点も指摘されており、先行研究[6]ではそれがどのような意味を持つかについて述べられてきたが、院と契りを交わしたあとの二条の人生は紫の上とは大きく異なるものであったことに着目したい。

二条と紫の上との共通点の一つとして正妻ではない点が挙げられる。たしかに二人とも正妻にはなれなかったが、紫の上は正妻と同じような扱いを受け、源氏に非常に大切にされた。葵巻には「御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに思しまうくる御用意」というように、きちんと紫の上の裳着を執り行おうという源氏の心中が書かれている。実際の裳着の様子は描かれていないものの、源氏が紫の上をできるだけ妻として扱うようにしていることがうかがえる。また、須磨巻において「さぶらふ人々よりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。領じたまふ御庄、御牧よりはじめて、さるべき所どころの券などみな奉りおきたまふ」とあり、須磨への退去を決意した源氏が荘園や屋敷の地券を紫の上に預けたことからも、紫の上の妻としての地位を源氏が作り上げようとしていたことがわかる。荘園などの地券を渡すということは所有権を渡すことに等しく、源氏が紫の上の妻としての地位を確立させようとしたこと[7]がこの場面から読み取れる。また、源氏が須磨へ向かったあとに紫の上の住む西の対へ移ってきた源氏付きの女房たちは当初、紫の上に対抗意識を抱いていたが、彼女の優しい人柄や暮らしへの配慮などを感じ、「すぐれたる御心ざしもことわりなりけり」と思うようになったという。源氏が妻として扱うことはもちろん紫の上の地位を示すことになるが、後見がいない紫の上が自分の力で周囲の人々を納得させた[8]ことはとても意味のあることであり、妻としての正式な儀式などが執り行われなくても源氏の妻格として最期まで添い遂げることができた大きな要因となったと考えられる。

一方、二条も院と関係を結んだあとに院の正妻にはなれなかった点では紫の上と共通しているが、二条は妻格になったわけでもなかった。院と新枕を結び、御所に伴われたあとに記されている、二条の父・雅忠の「今さら、かくなかなかにては、悪しくこそ。ただ日ごろのさまにて召し置かれてこそ。忍ぶにつけて漏れむ名もなかなかにや」という言葉からも、後宮の一人でも女房でもない扱いで院のもとへ連れてこられたことがわかる。女御として入内したという噂も流れ、東二条院が不快感を抱いている様子を感じ取りながら、後宮の一人とも女房ともいえない立場を二条は「まがよひ居たり」と表現している。また、二条というような小路名は小上臈に付けられる名であるが、

佐野庸美氏[9]や高嶋藍氏[10]が指摘するように、二条は太政大臣である祖父久我通光の猶子として出仕していることから大上臈にあたるため、小路名をつけられるべき身分ではない。院も、東二条院が二条の扱いを批判した手紙の返事で「大納言、二条といふ名を付きて候ひしを、返しまゐらせ候ひしことは、世隠れなく候ふ。されば、呼ぶ人候はず、呼ばせ候はず」と述べており、二条という名前は返上したので二条と呼ぶ人はいないし呼ばせないとしているが、政治的な揉め事で院が出家を決意した際にお供する者として院が「女房には、東の御方、二条」と決めたと書かれていることから、院自身も二条の名を使用していたことがわかり、呼称からも彼女の不安定な立場がうかがえる。

第二節　後深草院との関係　―利用される性―

紫の上のように強引に御所に伴われたものの不安定な立場であった二条は、院と女性の取り持ち役をこなしたことを『とはずがたり』に記している。男性を女性と引き合わせる場面は『源氏物語』にも登場するが、源氏と藤壺の逢瀬を手伝った命婦や、柏木と女三の宮の手引きをした小侍従など、取り持ち役を行うのはすべて女房であり、紫の上がそういった役目を担うことはなかった。院と関係を結び、強引に御所に伴われた二条は、院と女性の取り持ち役を続けることで院の後宮の一人としては扱われていないことを痛感させられたのである。「その道芝をするにつけても、世に従ふは憂きならひかな」とあることからも、二条の心中が複雑だったことがうかがえる。

また、前斎宮や扇絵の女など、ある特定の女性の取り持ち役を担った際の出来事や心情も二条は事細かに記している。父・後嵯峨院の崩御により斎宮を退下した愷子内親王（前斎宮）と対面する院に伴われた二条は、院が好みそうな女性だと思っていたところ、部屋に帰るなり「幼くより参りし験に、このこと申しかなへたらむ、まめやかに心ざしありと思はむ」と院は二条に取り持ち役を催促する。男女関係がありながらもそういった言葉を二条に投げかけること自体が、二条の立場の曖昧さ、後宮の一人として大切にされない現状を物語っている。

しかし、巻二で扇絵の女の取り持ち役を担った際は、少し描かれ方が異なっている。院に三年越しに召された美しい扇絵の女を二条はさまざまな角度から酷評し、しまいに「姫君などは言ひぬべくもなし」「御剣の役などを勤めさせたくぞ見えはべりし」と記すほどであった。話に対してはきはきと返事をするところも院の好みではないのではと感じていると、案の定、女はすぐに帰されてしまう。しかし、二条は「よそも悲しき」「帰

るさの袖の上も思ひやられて」と同情する。先ほどまで女を酷評していたが、それは女性としての所作についての話であり、「帰されて当然」と思うのではなく、気に入らないから使い捨てられる女性に同情している。女房として、院を慕う者として院のために尽くそうという意識は見られない。

また、二条はささがにの女にも共感している。扇絵の女が参上する前にささがにの女が到着していたが、車に乗せたまま釣殿のあたりに置いておくよう命令したあと、扇絵の女と一夜を共にした院はその女のことをすっかり忘れており、二条が見に行った頃には夜通し続いた雨と涙により車も袖も濡れ、髪は洗ったばかりのようだったという。二条が参上を促すが、帰してほしいの一点張りなので結局女を帰してしまった。かわいそうに思った院が手紙を遣わすと、和歌とともに少しの髪が包まれていた。「出家などしけるにや。いとあへなきことなり」という院に対して、二条は「まことの道の御しるべ、憂きはうれしかりけむと推しはかられしか」と述べ、女に想いを馳せる。

『とはずがたり』には遊女に共感する場面もある。出家をして都を出立した二条が到着した美濃国赤坂の宿にいた姉妹の遊女が琴や琵琶を弾く様子に風情を感じ、二条は宮仕えのことを思い出す。姉の方が物憂げな表情をしていることに共感して涙を流すと、向こうから歌を詠みかけてきたことに二条は大変趣を感じて返歌をする。遊女に共感することは『源氏物語』をはじめ、どの作品でも描かれない。『更科日記』には遊女が登場するものの、「声すべて似るものなく、空にすみのぼりてめでたく歌をうたふ」「遠き火の光に、単衣の袖長やかに、扇さしかくして、歌うたひたる、いとあはれに見ゆ」と書かれているように、歌や仕草の美しさが印象に残ったとして特に共感などはしておらず、やはり二条の遊女の描き方は他に例を見ない。

二条は女性の取り持ち役を担ったことを書き残しただけでなく、召人や遊女に共感し、自分の心情も記したが、そこに「女房としての役目を果たそう」「主家の将来のために」という意識は見られないと言えるのではないだろうか。

第三節　有明の月との関係　―三角関係の在り方―

二条は『とはずがたり』の中で院と自分自身を源氏と紫の上の関係に重ねたように、有明の月と自分自身を柏木と女三の宮の関係に重ねているが、[1] 有明の月と柏木の間にはいくつかの違いがある。荒井由実子氏[2]は有明の月と二条の関係における『源氏物語』との相違点について「境遇」や「出会い方」などを挙げているが、大きく異なるのはやはり「関係が露呈したあとの

主人の反応」であろう。

源氏は柏木が女三の宮と通じていると知ったとき、二人の行動の軽率さに失望する。「紛るべき方なくその人の手なりけり」と柏木の筆跡だと確信した源氏は、手紙をこんなところに置いておくなんてやはり女三の宮はたしなみのない人だと感じ、柏木に対しても自分の過去と照らし合わせて、こういう場合は手紙にありのままのことを書くべきではないのにと考えの浅はかさを心の中で批判した。そして対面した際に源氏は、女三の宮に対して「院の御世の残り久しくもおはせじ。いとあつしくいとどなりまさりたまひて、もの心細げにのみ思したるに、今さらに思はずなる御名漏り聞こえて、御心乱りたまふな」と老い先短い朱雀院の成仏の妨げになるようなことはするなと諭した。また、試楽を眺める柏木の笑みに対して「過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」と源氏は皮肉を言い放ち、恐怖を感じた柏木が酔いを理由に退席しようとすると、源氏はそれを見咎めて酒を飲むよう強いる。これをきっかけに柏木は病に倒れて亡くなってしまい、女三の宮も出家の道を選ぶこととなる。

一方、『とはずがたり』では、院と東二条院との娘・遊義門院の平癒祈禱のために訪れた有明の月が二条を口説いているところを院が立ち聞きしたことで、二人の関係が露呈する。院が部屋に入り、有明の月は何ともなかったように装うが、「絞りもあへざりつる御涙は包む袂に残りあれば、いかが御覧じ咎むらむ」と二条は院の反応を心配する。しかし、有明の月が帰ったあと、院は自分たちの関係に気づいていると感じた二条が有明の月との出会いから契りを交わした夜のことまで偽りなく伝えると、院は説話を持ち出しながら「我試みたらば、つゆ人は知るまじ」と二人の仲立ちを買って出るのであった。

そして二条が有明の月との子を出産する際にも、有明の月と二条の関係が世間に知られてしまったので、今日死産した自分の子供と交換し、有明の月との子供は死産したことにしようと提案し、院はどこまでも二人の関係を容認する。源氏と違って二条を責めたり有明の月に皮肉を言ったりすることはなく、関係を認めて子供のことまで気にかける院に対して、二条は院の計らいを「浅からぬ御心ざしはうれしき」と思うが、自分の子供であるのに他の家へ引き取られていくことを悲しく思ったという。

有明の月と二条の関係を許すという院の行動は不可解と捉え

られてきた。次田氏[13]は「院は許すといいながら、局に戻ってきた彼女を呼びつけ、寝ないで待っていたと彼女を苛む。彼女が有明の子を妊ったのを知り、それを生むまでを見届けようという。やはりこの心理は異常である。こうすることで嗜虐的な興味を満足させていたという他はない」と述べている。祐野隆三氏[14]も、二人の関係を知ったあと有明の月との真言の談義の中で院が「人の契り逃れがたきこと」と発言していることから、「この発言は、常に『とはずがたり』の基調音として底に流れている極めて重要な発言であると思われる。院がこれだけの考えを持って高僧阿闍梨の愛欲生活に正当性を持たせようとするのは当時と言えども常識では考えられないことであろう」と述べている。

なぜ院は二条たちの関係を許したのであろうか。それは二条が院の妻格ではないからではないか。源氏が柏木からの手紙を女三の宮の寝室で発見した際、「さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまをうしろめたしとは見るかし」とまず女三の宮の幼稚さに落胆している。源氏が二人の関係を許さなかったのは女三の宮が源氏の正妻であったことが直接的な原因ではないかもしれないが、もし他の男性と通じているのが源氏と関係を持っている女房だった場合、源氏は女性を注意したり男性に皮肉を言ったりするだろうか。

主人に関係が露呈することから有明の月と二条の関係は柏木と女三の宮の関係と重ねられ、二条は『源氏物語』の表現を引用しながら有明の月との関係を描いた。しかし、関係が露呈したあとも主人がその関係を許すどころか、仲を取り持つということは柏木・女三の宮の関係と大きく異なる点であり、院の言動は異常だという見方がなされてきた。たしかに、当時といえども院の反応は常軌を逸しているのかもしれない。しかし、有明の月との関係を院に許されるということは、二条が院の妻格ではなく、院から寵愛を受けていた一人にすぎないという事実の表れなのではないだろうか。天皇家に生まれ今を時めく源氏の正妻として降嫁し、柏木との関係を源氏に許されなかった女三の宮と、院に仕えた大勢の中の一人であり、有明の月との関係を院に許され仲を取り持たれた二条。『源氏物語』の場面や登場人物と重ねることで、かえって互いの違いが浮かび上がり、『とはずがたり』の世界が強い独自性を持った唯一無二のものとして捉えられることになる。

第四節　有明の月との関係　―高僧の恋―

ところで、僧の好色話は物語文学作品でも見られる。今井源

衛氏[15]は『大和物語』四十二～四十四段や『平中物語』十七段、『宇津保物語』を挙げ、「僧に対する他からの非難がましい口吻は皆無で、むしろ逆にこの僧の恋愛に共感的である」としている。そして散逸した『かくれみの』には『大和物語』などには見えなかった僧の恋に対する悪意が表れており、『現存本住吉物語』の六角堂の別当や『狭衣物語』の威儀師がそれを受け継いでいるとした。しかし、今関敏子氏[16]はこれらの作品に登場する僧の階級が低いことから、「背徳、背信の意識から逃れられず、罪悪感におののき、煩悶しながら一途に燃える有明の情念は、〈色好み〉の僧の持つ、ある種滑稽味ある余裕からは遠い」としている。そして、『源氏物語』では横川の僧都のように僧は「いと尊き人」として描かれており、有明の月のような高僧が一心不乱に女性を求める話は決して見られない。他にも平安時代に書かれた『宇津保物語』に阿闍梨の忠こそがあて宮に手紙を送る場面があり、『とはずがたり』と同じ中世に成立した『浅茅が露』には加持祈祷に訪れた僧が姫宮のところへ忍び入る場面が見えるが、有明の月のように高僧が積極的に相手に会いに行くというような描写は見られない。

有明の月との関係を許すことから始まる院の一連の動きは、政治的な問題が関連しているとも考えられている。阿部泰郎氏[17]は

すべてを院に知られ、逃れぬ証さえ突きつけられた有明は、ここに進退きわまり、院に全く屈服を余儀なくされる。有明が性助法親王の隠名であるのなら、院の異母弟であるが、されば対立する亀山院の側に立つべき可能性もあった人なのである。そのとき、ここに有明が、院の「若宮」を弟子に賜わり、自分の後継者となして、自らは遁世籠居（つまり寺務を譲り隠退）しようとは、先述した院権力の重要な一角である法親王位の移譲についての契約と見なしてよい。すなわち、ここに至って有明が担い保つ御室の仏法の権威は全く後深草院の門下に伏し、その門跡は院の側の皇統たる持明院統に継承されることになったのである。

と述べており、院が有明の月との関係を把握し容認することで、持明院統の勢力を強めたのだとしている。また、高嶋氏[18]は『とはずがたり』において、二条は「大上臈女房としての立場を効果的に記したい場合」に禁色の唐衣を描いており、院が扇を二条に取りに行かせて有明の月のもとへ行くように仕向けた際にも赤色の唐衣を身につけていることから、「二条は持明院統のため、大上臈女房としての役務の中で有明の月に下賜されたのである」と述べている。有明の月という高僧が恋に溺れる様が中世という時代を表しているということは、政治的側面以外か

らも論じられており、今井氏[19]は平安時代後期の意見書や『沙石集』に僧の堕落について言及されていることから、「「問はずがたり」に見える高僧と女房との痴情も、当時の頽廃した宮廷の風俗を如実に物語っている」としている。

ここで、二条と有明の月の関係を院が容認したあとの流れを見てみると、二条は院の使者を装って有明の月の元へ向かっており、院は局に戻った二条を呼び寄せ、「ただ今しも、飽かぬなごりも、後朝の空は心なく」と不快感を露わにしている。二条と有明の月の関係を容認したのは、院が自分の興味を満足させるためだったのか、それとも政治的に有利な立場に立つためだったのか、それを明らかにすることはできないが、いずれにせよ今まで院の支配下で有明の月と逢瀬をしていた二条が、このとき初めて自ら有明の月の元へ向かったことによって院の支配下から外れたと考えると、院が不快感を露わにしたことはそこまで異常とは感じられないだろう。むしろ、自ら有明の月に会いに行くという二条の行動にこそ、特異性を感じられないだろうか。今まで院に催促されてからしか有明の月に会いにいかなかった二条が自ら有明の月の元へ向かったということは、二条が女房としての意識より、一人の女性としての意識の方を強く持っているということではないか。院は二条を意のままに動かしていたが、二条の行動から「院に従おう」「持明院統のために尽くそう」という考えを汲み取ることは難しい。

二条が書き記した出来事に後世の人間は驚き、惹かれたのであるが、二条の人生が特異なのではなく、主人のために尽くそうという女房としての意識が感じられない書き方が『とはずがたり』の独自性として表れているのではないだろうか。

第二章　女房日記における主家賛美

第一節　鎌倉時代の女房日記における「めでたし」

『とはずがたり』は日記であるため、物語である『源氏物語』と異なるのは当然のことかもしれない。では、他の女房日記と比較したとき、どのような違いが見られるのだろうか。『とはずがたり』と同じ鎌倉時代に成立した日記の中でも後深草院に関係のある『弁内侍日記』と『中務内侍日記』の二つを考察してみよう。

二条は後深草院に仕えたが、その院の幼少期に女房として出仕していたのが、藤原信実の娘、弁内侍であった。その弁内侍が記した『弁内侍日記』は作品全体に明るさが漂っていることが特徴的で、大内摩耶子氏[20]は『弁内侍日記』に登場する快適感

情を示す語のうち、使用回数の上位二語は「おもしろし」（七十七例）「をかし」（二十七例）であり、その二語が作品を明るいものにしていると述べた。しかし、『弁内侍日記』の冒頭に登場するのは「めでたし」という語である。

〈一〉寛元四年正月廿九日、富小路殿にて御譲位なり。その程の事ども、数々しるしがたし。いといとめでたくて、弁内侍、

今日よりは我が君の世と名づけつつ月日し空にあふがざらめや　（一四六頁）

〈二〉三月十一日、官庁にて御即位。春の日もことにうららかなりしに、様々の儀式ども、言はん方なくめでたし。人々の姿ども、珍かに見え侍りしかば、弁内侍、

たまゆらに錦をよろふ姿こそ千歳は今日といや珍なれ　（一四六頁）

〈一〉は後嵯峨天皇譲位、〈二〉は後深草天皇即位の場面である。今関氏[21]が「一体、どのように「めでたし」であるのか、その内容は具体的に説明されない。一旦、「めでたし」と表現されると、別の表現に言い換えられることがない」と指摘しているように、譲位や即位の何がめでたいのか明言されていないが、冒頭で「めでたし」が続けて記されることによって、弁内侍が主家賛美する女房の立場で『弁内侍日記』を書いたことが印象づけられる。

先ほどの二例を含め、『弁内侍日記』には「めでたし」という語は十二例使用されているが、代表的なものを四例あげておく。

〈三〉五月四日、記録所の行幸なり。大宮大納言、万里小路大納言、左衛門督、右兵衛督、頭中将雅家、公保、資保、通世。例の五節のまねせさせて御覧ず。物言ひて舞ふべき由、仰言あれば、大宮大納言、衣冠にてめづらしき姿とおぼしたるにや、「内蔵頭隆行」とて立ち給ふ。万里小路、「あはれさやけき月かな」、左衛門督、万歳楽、右衛門督、「左衛門の陣より参らむや、右衛門の陣より参らむや」と例の美しき声にて、何事も聞きどころありてめでたし。　（一七三頁）

〈四〉十月十三日、鳥羽殿へ朝覲の行幸なり。宵の程は、時雨もやなど思ひ侍りしに、朝、ことに晴れていとめでたくぞ侍りし。鳥羽殿の御所の景気の面白さ、ことわりにも過ぎたり。色々の紅葉も、折を得たる心地す。龍頭鷁首浮べる池の汀の紅葉など、たとへむ方なし。髪上の内侍、匂当内侍・少将内侍なり。日暮し髪上げて、さまざま面白くめでたき事ども見出だして、「老の後の物語はいく

らも侍るべし」など言ひて、（中略）還御の後、めでたかりしその日の事ども申し出でて、染下襲、誰がしは何色、何色と、少将萩の戸にて記し侍りしに、太政大臣殿の裏表白き御下襲、ことにいみじく覚えて、弁内侍、

白妙の鶴の毛衣何として染めぬを染むる色といふらん

（二二八～二二九頁）

〈三〉は新編日本古典文学全集の頭注を見ると、記録所の御幸という名目で幼い後深草天皇が父の後嵯峨院を訪問しただろうとされている。後深草天皇を歓待するために五節の真似をさせた中で、左衛門督や右衛門督の歌声が素晴らしく、「めでたし」と記している。〈四〉では、天皇が上皇・国母に拝謁する朝覲の行幸の様子が描かれている。時雨が降るかと心配されていたが朝には晴れたので「めでたし」と記す。また、儀式の様子も「面白くめでたき事ども」であったので、儀式に参列していた少将内侍と歌を交わしたことも描かれている。還御のあとに少将内侍が参列者の衣装の色を書き留めていることや、太政大臣の下襲が一番立派だったと記していることからも、儀式が「めでたかりしその日の事ども」であったことが伝わり、『弁内侍日記』では天皇の譲位や即位、節会などの宮廷の儀式の様子が「めでたし」という語を用いて描かれている。

後深草院の皇子である伏見天皇の春宮時代から仕えた中務内侍が作者である『中務内侍日記』は『弁内侍日記』の明るさと比較され、哀愁に満ちた作品と評されることが多い。福田秀一氏[22]は心情を表す形容詞に着目し、『弁内侍日記』と比べて「あはれ」「悲し」「はかなし」などの「悲哀な感じの語」が多く見られると述べ、そのことが「沈潜的な哀愁の色調」につながっているとしている。しかし、一二八七年一〇月二十五日の方違の行幸では、歌会の人数に入っていることを「数に漏れぬ身、我ながら嬉しうこそ覚ゆれ」と記したり、大嘗会の衣装準備の際に「衣の掛けやう、思ひ所ありげにこそ掛けたれ」「しつらひ優し」と後深草院に褒められたという記述もあり、内侍として評価されたことの誇りが表れている。村田紀子氏[23]はこういった場面には「即位以前の記事に見られた無常観・哀調は殆んどないと言ってよい」と述べている。

人生を嘆きつつも作者の任務や誇りが書き記されている『中務内侍日記』では、仕えた伏見天皇や天皇家に関してはどういう姿勢で記述しているのか。ここでも「めでたし」という語に注目してみたい。

『中務内侍日記』における「めでたし」の九例ある用例のうち、主な二例をあげておく。

〈五〉その後御心地例ならず、瘧病にてぞわたらせおはしませば、面白く忘れがたかりし名残も、此の御事の浅ましさによろづ物憂くて日数積るに、八月にもなりぬ。ありし野上、ふと思し召し出でらるゝに、大夫殿の御歌あり。

今かゝる心にもなほ忘られず野上の道の今朝の曙

御返事、

今思へばまことや今日にてありしかな野上の松の夜の明けし色

浅ましき中にも、公私、忘れがたく恋しきに、若き女房達、「今日はいかに」など言ふにつけても思ひ出でらるゝ事多し。笹に露置きたるが、ありしながらぞかしと思ふに、我が唐衣のなつかしさも悲しくて、

忘れずよ野上に茂るわれもかう分けし袂の露もまだ干ず

かくて日数積らせ給ふ御事、浅ましかりしに、めでたく落ちさせおはしましぬ。（五六頁）

〈六〉二月十日、春日の臨時の祭に立つ。此の儀、初めたる事なれば、面白くも嬉しくて。酉の始に梨原に着きぬ。子にもやなりぬらんの程にぞ、宮に参る。更けたる月の、木の間より見えて、庭火の影、神さびたる笛の音、拍子の音もすごく、舞人の立ち舞ふ気色、光を神もいかにと、面白くめでたし。（一七六頁）

〈五〉は春宮が病にかかる場面。面白かった先月の遊覧に想いを馳せている春宮に、西園寺実兼が「先月お供した遊覧の朝が忘れられない」という手紙を送る。政治家としての実兼の姿を記しながらも、春宮の病が全快したことを「めでたし」という言葉で締めている。〈六〉は春日臨時祭の場面である。後深草院の勅願により開かれたことが初めてだったので面白くも嬉しくも思われたという。木々から漏れる月の光や笛の音が染み渡り、舞人の舞う姿が素晴らしくてこの祭りを神はどう見るだとうと「面白くめでたし」と賛美する。臨時祭の開催と同時に後深草院は太上天皇の名を辞して落飾したことにより、政務は伏見天皇に譲られ、いよいよ伏見天皇の時代となった。その喜びはこの記事のあとの「君が世にかゝる光の色そふる神の心も思ひ知られて」という歌にも表れている。少し重い空気の漂う『中務内侍日記』であるが、病気の快復、臨時祭などの催し物の際に「めでたし」という語が使用されており、主家賛美の姿勢が表れていると言えるだろう。

第二節　『とはずがたり』における「めでたし」

では、『とはずがたり』ではどのような姿勢で院や天皇家が描かれているのか。主家賛美の表現である「めでたし」という語の用例を確認してみる。

『とはずがたり』における「めでたし」の用例は七例である。

（一）女房たちの単衣襲・生絹の衣、面々に押し出だせば、御産奉行取りて、殿上人に賜ぶ。上下の北面、面々に御誦経の僧に参る。階下には公卿着座して、皇子御誕生を待つ気色なり。陰陽師は庭に八脚を立てて、千度の御祓を勤む。殿上人これを取り次ぐ。女房たちの、袖口を出してこれを取り渡す。御随身、北面の下臈、神馬を引く。御拝ありて、二十一社へ引かせらる。人間に生を享けて、女の身を得るほどにては、かくてこそあらめと、めでたくぞ見えたまひし。

七仏薬師大阿闍梨召されて、伴僧三人、声すぐれたる限りにて、薬師経を読ませらる。「見者歓喜」といふわたりを読む折、御産なりぬ。まづ内外、「あなめでた」と申すほどに、内へころばしこそ、本意なくおぼえさせおはしましかども、御験者の禄、いしいしは常のことなり。（巻一・二一二頁）

（二）日高くなるほどに、さまざまのことども用意して、伺候の者二人ばかり来たり。「あなむつかし」と見るほどに、主の尼たちの取り散らすべき物など、分かちやる。「年の暮れの風の寒けさも忘れぬべく」など言ふほどに、念仏の尼たちの袈裟・衣、仏の手向けになど思ひよらるるに、いよいよ「山賊の垣ほも光出で来て」など、面々に言ひ合いたるこそ、聖衆の来迎よりほかは、君の御幸に過ぎたるやあるべきに、いとかすかに見送りたてまつりたるばかりにて、「ゆゆし」、「めでたし」など言ふ人もなかりき。言ふにや及ぶ、「かかることやは」とも言ふべきことは。ただ今の賑ははしさに、誰も誰も愛でまどふさま、世のならひもむつかし。（巻一・二四九頁）

（三）夜中ばかりより、ことにわづらはしくなりたり。叔母の京極殿、御使とておはしなど、心ばかりはひしめく。兵部卿もおはしなどしたるも、あらましかばと思ふ涙は。人に寄りかかりてちとまどろみたるに、昔ながらに変らぬ姿にて、心苦しげにて後ろの方へ立ち寄るやうにすと思ふほどに、皇子誕生と申すべきにや、事故なくなりぬるはめでたけれども、それにつけても、わが過ちの行く末いかがならむと、今始めたることのやうに、いとあさ

ましきに、御佩刀など忍びたるさまながら、御験者の禄などことごとしからぬさまに、隆顕ぞ沙汰しはべる。

（巻一・二五一～二五二頁）

（四）女院御悩み、御脚の気にて、いたくの御事なければ、めでたき御事とて、両院御慶びの事あるべしとて、まづ一院の御分、春宮大夫うけたまはる。（巻三・三七四頁）

（五）御所には、当国司、足利より、みなさるべき人々は布衣なり。御馬引かれなどする儀式、めでたく見ゆ。三日に当る日は、山内といふ相模殿の山荘へ御入などとて、めでたく聞こゆることどもを見聞くにも、雲居の昔の御事も思ひ出でられて、あはれなり。（巻四・四四三頁）

（一）は東二条院出産の場面。多くの祈祷者が集まり、院も無事の出産を必死に願う様子に「めでたくぞ見えたまひし」と思ったと記されているが、「人間に生を享けて、女の身を得るほどにては、かくてこそあらめ」とあるので、東二条院を讃えているというよりは女の幸せに焦点を当てている印象を受ける。無事子供が産まれ、人々が「あなめでた」と祝ったと記しているが、その後、生まれた姫宮の五日目、七日目の祝いは「ことにはべりし」と記すだけであり、皇子の産養いまで克明に記されている『紫式部日記』との違いが見える。（二）は、二条が院との子供の出産のために御所を退出している際に、雪の曙が訪れる場面である。気前のよいお布施に尼たちが喜ぶ姿を見て、「聖衆の来迎よりほかは、君の御幸に過ぎたるやあるべき」はずであるのに、院が訪れた際はほんの少ししか見送らなかったうえに「ゆゆし」「めでたし」と言う人もいなかったと記す。二条が「めでたし」と感じた場面ではないが、院の御幸を「めでたし」と思うべきなのにと書いていることから、主家賛美の精神が全くないとは言い切れないが、ここでは雪の曙のお布施に焦点が当てられており、西園寺家の財力が印象に残る場面である。（三）は、院との子供を二条が出産する場面である。「あらましかば」（父が生きていたならば）と思いながらうとうとしていると、昔の姿のままの父が現れ、二条の後ろに回ったと思ううちに皇子が産まれたという。「事故なくなりぬるはめでたけれども」とあるので、院の子供が産まれたことの素晴らしさというより無事に出産できたことへの「めでたし」と捉える方が自然だろう。そして、同じ出産場面でも規模の大きさや験者への禄など、東二条院との差が歴然としているうえに、二条は出産したあとすぐに雪の曙との新枕を「わが過ちの行く末いかがならむと、今始めたることのやうに、いとあさましき」と気にかけ、父が生きていたなら実家である河崎の家で出産した

だろうにと思いを巡らせており、院の子供が生まれたことに対して「めでたし」という心情は薄い。（四）では大宮院の病気がただの脚気であったことに対して「めでたき御事」と記されているが、「とて」とあるので、二条自身が感じたことというよりは周りが「めでたき御事」と感じているととれる。また快気祝いの内容も、何色の布で何を献上したのか、誰がどの楽器を弾いたかなど、細かく記されているが、「めでたし」という語は登場しない。（五）では二条はすでに出家している。都を出て東国を旅している途中、後深草院の皇子である久明親王が新将軍として下向してくるところに遭遇し、その様子を「めでたく」と記す。今までとは少し異なり、天皇家への賛美の気持ちが記されていると捉えることができるかもしれない。しかし、周囲の人が噂しているのを聞いて昔のことを思い出し、感慨無量であると記しているので、新将軍を迎え入れる準備を手伝ったことや、新将軍が後深草院の血縁であることなどから宮仕えしていた昔を思い出して「めでたく」様子を眺めたともとれ、純粋に天皇家を賛美しているとは読めない。

また、『弁内侍日記』と『中務内侍日記』において主人の病気の回復や宮廷での催しの中で「めでたし」という語が使用されていたが、『とはずがたり』において後深草院が病にかかる場面と北山の准后の九十賀が行われた場面で二条はどういう表現を用いているのだろうか。

かくしつつ、八月のころにや、御所に、さしたる御心地にてはなく、そこはかとなく悩みわたりたまふことありて、供御を参らで、御汗垂りなどしつつ、日数重なれば、いかなることにかと思ひさわぎ、医師参りなどして、御灸始めて、十所ばかりせさせおはしましなどすれども、同じさまにわたらせおはしませば、九月の八日よりにや、延命供始められて、七日過ぎぬるに、なほ同じさまなる御事なれば、いかなるべき御事にかと嘆くに、さてもこの阿闍梨に御参りあるは、この春、袖の涙の色を見せたまひしかば、御使に参る折々も言ひ出だしなどしたまへども、紛らはしつつ過ぎゆくに、このほどこまやかなる御文を賜はりて、返事を責めわたりたまふ。（巻二・二九七頁）

このほどは隙をうかがひつつ、夜を経てといふばかり見たてまつれば、この度の御修法は心清からぬ御祈誓、仏の御心中も恥づかしきに、二七日の末つ方よりよろしくなりたまひて、三七日にて御結願ありて出でまふ。（巻二・三〇〇頁）

院の体調がすぐれず、灸などを据えても変化がなかったので延命供を始めるものの病状が変わらず、「いかなるべき御事にか」と二条は不安に思う。しかし、このあと祈禱のために参上した有明の月が懲りずに二条に言い寄ってくることが描かれており、二条は一方的に送られてくる有明の月からの手紙を面倒に思うものの、返歌を「優におもしろくおぼえ」、結局有明の月と契るまでに至った話が記される。院の祈禱の様子や快復後の感想などはなく、有明の月との出来事に焦点が当てられている。

兼行、「花上苑に明らかなり」と詠ず。ことさら物の音調ほりておもしろきに、二返終りて後、「情けなきことを機婦に妬む」と一院詠ぜさせおはしましたるに、新院・春宮御声加へたるは、なべてにやは聞こえむ。楽終りぬれば還御あるも、飽かず御なごり多くぞ人々申しはべりし。

何となく世の中の華やかにおもしろきを見るにつけても、かき暗す心の中は、さし出でつらむも悔しき心地して、妙音堂の御声なごり悲しきままに、御鞠など聞こゆれども、さしも出でぬに、隆良、「文」とて持ちて来たり。

（巻三・四一七～四一八頁）

御所退出後、二条は北山の准后の九十賀に呼ばれる。その様子は非常に詳しく記されており、時折「おもしろし」と感想を書き添えるものの、「めでたし」という語はない。また、院の朗詠の素晴らしさを「なべてにやは聞こえむ」と記すが、すぐあとに華やかな催しとは対照的な気分であることを書き留めている。儀式の華やかさ故に自分がもう出仕している身ではないことを痛感させられた二条の心情からも、『とはずがたり』には主家賛美の意識は薄いと読めるのではないだろうか。『紫式部日記』にも同じように自身の暗い気持ちが記されており、出家の思いも垣間見られるが、彰子や藤原家の栄世を華やかに描き、喜ぶ人々を細かく描写している点で『とはずがたり』とは異なる。

このように、『弁内侍日記』『中務内侍日記』において主人や主家を賛美する際に使われる「めでたし」という語は、『とはずがたり』ではあまり重点を置いて使用されることがない。また、主人の病気の快復や宮廷での催しなど、中世の女房日記において「めでたし」という語が使われている場面では、二条は「めでたし」という語を使っておらず、むしろ二条の心情や情景描写を描くことに重きが置かれている。「めでたし」という語の使われ方からも、二条が女房の視点から『とはずがたり』を書いていないことがわかる。

第三章　『とはずがたり』の独自性

二条は御所を追放されたあと出家を果たし、諸国を旅することとなる。伏見で院と再会した際、院が二条に「東、唐土まで尋ねゆくも、男は常のならひなり、女は障り多くて、さやうの修行かなはずとこそ聞け。いかなる者に契りを結びて、憂き世を厭ふ友としけるぞ。一人尋ねては、さりともいかがあらむ」という言葉をかけていることから、男性に頼って援助してもらわない限り、女性が一人で旅をすることは難しいという認識があったことがわかり、当時としても二条は珍しい存在であったことがうかがえる。

二条の出家後の旅について、今関氏[24]は「作者の出家は、不本意に御所を追われ、喪失感を拭いきれないまま、やむなくなされた側面が強く、喪失した時間と場への回帰性の強いものである」とし、「『とはずがたり』の出家は、従来言われてきたような意志的にして自由な女西行、中世的な新しい生き方、という自由な側面よりも、実ははるかに〝零落と流浪〟という落ちぶれの側面が強いと思われる」と述べている。また、寺尾美子氏[25]も「この旅は決して撰び取られて実行されたり、自ら進んで求道の世界へ入って行ったりしたものではなく、身の拠り所をなくした女の、余儀なく出発した、いわば漂泊の旅である」と主張している。たしかに、二条が旅に出ることになったのは、御所を追放されたからである。しかし、諸国を旅して御所の外の世界を体験したことで二条は宮廷での出来事を客観的に見つめ直すことができ、女房として院を賛美するのではなく自分が感じたことをそのまま記す姿勢を培ったのではないだろうか。本論文の初めに引用した、院の棺を二条が裸足で追いかける場面は、二条が自分の立場にとらわれることなく自分の心情を素直に書き記した、その最たるものではないだろうか。

『とはずがたり』は『源氏物語』を彷彿とさせるような書き方をしているが、二条の人生は『源氏物語』とは似ても似つかないようなものであった。『源氏物語』に似せることによって二条の人生が特異であることが際立ち、他の女房日記には見られないその内容は『とはずがたり』の独自性として捉えられてきた。しかし、その一見特異と思える人生を素直に記すという、立場にとらわれない姿勢も『とはずがたり』の独自性の一つだと言えるのではないだろうか。

参考文献

（1）　玉井幸助「問はず語り―特異の文学―」（『国文学　解釈

と鑑賞』一九巻一号　一九五四年一月）

（2）　次田香澄「問はず語り―愛と現実」（『国文学　解釈と教材の研究』二四巻一〇号　一九七九年八月）

（3）　清水好子「古典としての源氏物語―とはずがたり執筆の意味―」（山本登朗ほか編『源氏物語と歌』武蔵野書院　二〇一四年六月）

（4）　西沢正史「『とはずがたり』における『源氏物語』」（石原昭平ほか編『とはずがたり・中世女流日記文学の世界』勉誠社　一九九〇年五月）

（5）　（3）に同じ。

（6）　（4）に同じ、渡辺嘉江「『とはずがたり』における二条―紫の上への思いについて―」（『広島女学院大学国語国文学誌』二六巻　一九九六年一二月）、兵藤裕己「『とはずがたり』の『源氏物語』引用―イデオロギーとしての文化資源―」（『国語と国文学』七七巻一一号　二〇〇〇年一一月）

（7）　増田繁夫「紫上の妻としての地位―十世紀末の貴族社会の結婚・夫婦関係―」（森一郎ほか編『源氏物語の展望』第1輯　三弥井書店　二〇〇七年三月）

（8）　熊谷義隆「正妻・紫上への道―光源氏が意図したもの―」（森一郎ほか編『源氏物語の展望』第6輯　三弥井書店　二〇〇九年一〇月）

（9）　佐野庸美「『とはずがたり』作者の職掌と身分に関する一考察」（『国語国文学研究』三六巻　二〇〇一年二月）

（10）　高嶋藍「『とはずがたり』における両統迭立―禁色の唐衣を視座として―」（大阪大学古代中世文学研究会『皇統迭立と文学形成』和泉書院　二〇〇九年七月）

（11）　（3）と同じ。

（12）　荒井由実子「有明の月と二条をかたどる『源氏物語』引用―後深草院の存在理由と規定について―」（『学芸古典文学』五巻　二〇一二年三月）

（13）　（2）に同じ。

（14）　祐野隆三「『とはずがたり』における有明の月」（石原昭平ほか編『とはずがたり・中世女流日記文学の世界』勉誠社　一九九〇年五月）

（15）　今井源衛「平安朝文学における僧侶の恋」（『語文研究』三七巻　一九七四年八月）

（16）　今関敏子「宮廷女房と〈色好み〉―『とはずがたり』における様相―」（『帝塚山学院大学研究論集』三〇巻　一九九五年一二月）

（17）　阿部泰郎「『とはずがたり』の王権と仏法―有明月と崇

徳院」（赤坂憲雄『王権の基層へ』新曜社　一九九二年五月）

（18）（10）に同じ。

（19）（15）に同じ。

（20）大内摩耶子『弁内侍日記考』（『大阪府立大学紀要 人文・社会科学』一二巻　一九六四年六月）

（21）今関敏子『中世女流日記文学論考』（和泉書院　一九八七年三月）

（22）福田秀一「中務内侍日記と人生の哀愁」（『国文学 解釈と教材の研究』一〇巻一四号　一九六五年一二月）

（23）村田紀子「中務内侍日記」（石原昭平ほか編『とはずがたり・中世女流日記文学の世界』勉誠社　一九九〇年五月）

（24）（21）に同じ。

（25）寺尾美子「『とはずがたり』の旅における小町幻想とその現実」（日記文学懇話会『日記文学研究』第一集　新典社　一九九三年五月）

（ふるたに　ゆかり／本学大学院修了）